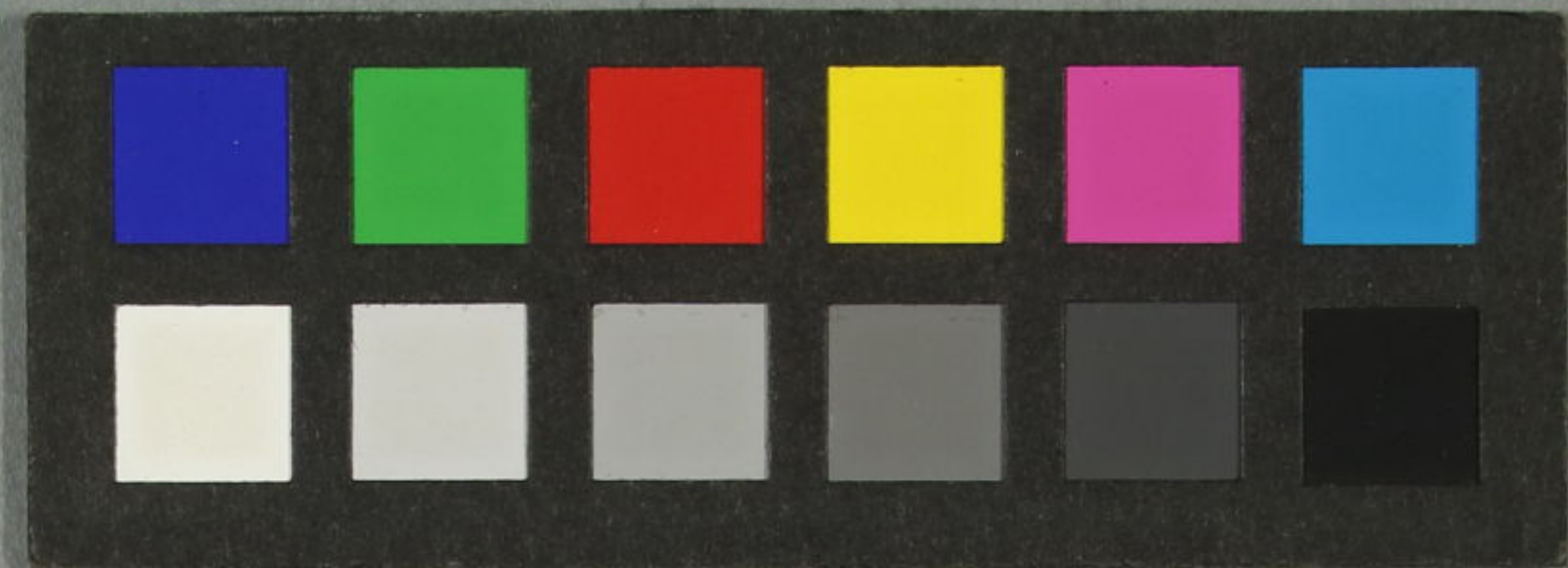




俳諧袖珍鈔

三

5
1128
3





袖珍抄附合歌仙之部卷一
古終舎黙池輯



拾遺	越田秋仙	佐波集	續猿蓑	你川集	炭俵	猿蓑	必りこ	曠野	冬の目
三十七丁	三十四丁	廿四丁	二十丁	十七丁	十三丁	九丁	七丁	六丁	初丁
六卷	三卷	十卷	四卷	三卷	四卷	四卷	二卷	一卷	五卷



氣水五圓水兮園氣兮五氣水五平

五

五國水分圖氣分五系水系圖水分圖氣分

水國兮五國第五水國兮水國正平第五

分五國府五水府分水國分五國府五水府分

おれ日 田家脱宅

霜月や鶴のつゝ金ひたて 荷
 冬乃初日のあつたけり 石
 根松山家の外と木の葉降 五
 乙未の年の中の地をなす 杜
 音もけき長きとあけぬ 松
 物もなき草葉切つて 水
 秋の夜松の葉遠く 石
 漸く秋の富士とあけ 石
 寂しく松の葉をなす 五
 弟と弟のあけとあけ 五
 雛子とあけとあけ 水
 庭ふあけとあけ 五
 友とあけとあけ 石
 麻うとあけとあけ 石
 月とあけとあけ 五
 衣とあけとあけ 石
 笠とあけとあけ 水

おれ日 田家脱宅

霜月や鶴のつゝ金ひたて 荷
 冬乃初日のあつたけり 石
 根松山家の外と木の葉降 五
 乙未の年の中の地をなす 杜
 音もけき長きとあけぬ 松
 物もなき草葉切つて 水
 秋の夜松の葉遠く 石
 漸く秋の富士とあけ 石
 寂しく松の葉をなす 五
 弟と弟のあけとあけ 五
 雛子とあけとあけ 水
 庭ふあけとあけ 五
 友とあけとあけ 石
 麻うとあけとあけ 石
 月とあけとあけ 五
 衣とあけとあけ 石
 笠とあけとあけ 水

後野 源氏の歌

厚きも静きけいふひまや 越人
 海まじあふみちの月 人
 蒼きも海は静かなる人
 静をよめさる秋の夕人
 秋葉のまきまき人
 けしきも静かなる人
 何ともしあふみちの月 人
 遠くあふみちの月 人
 いそぐと海まじあふみちの月 人
 ひろく世はやくちの月 人
 はるふちの月 人
 望みもさるあふみちの月 人
 きぬくやあふみちの月 人
 風まじあふみちの月 人
 もつとあふみちの月 人
 もつとあふみちの月 人
 月まじあふみちの月 人
 月まじあふみちの月 人

破さるの月 人
 みせの月 人
 画きてあふみちの月 人
 おかきあふみちの月 人
 人まじあふみちの月 人
 秋まじあふみちの月 人
 望みもさるあふみちの月 人
 あやあふみちの月 人
 何ともしあふみちの月 人
 月まじあふみちの月 人
 きぬくやあふみちの月 人
 秋の月 人
 さの月 人
 いそぐと海まじあふみちの月 人
 ひろく世はやくちの月 人
 はるふちの月 人
 望みもさるあふみちの月 人
 きぬくやあふみちの月 人

ひきこ 承見

本城よりけしなを中へ移れ 石
西日のとうふ能てれぬ 石
旅人れれきさのきとれて 曲水
くはしなうくぬきる緒 石
月すちて仮の月裡れ目石
初初つゝを移るやうに 水
秋風と雲物と秋のきそ 石
なちさふくし降るるも 石
入はは流の浦のたふれ 水
中やせいのきふ山伏 石
しやのと一ふたふ 石
物より移るは 石
物より移るは 石
月人る魚の移りたる 石
秋風の移りたる 石
しやうや白子あま 石
子あまむきあまの二つ 石
巡りあむるのうけ 水

三

初より移るは 石
ふかくさふ力いふき 石
移り目をいふは 水
然れんは 石
も来り紀の末も 石
酒て元も 水
双ふけ月と歌と 石
かりの移り 石
中へ玉ふは 水
我名は 石
ふすれは 石
月あ 水
二
たふ 石
一 水
匠名の 石
ま 水
比ふ 石

卷之

雪れ雲れもはるけの程に
月れ出るかの赤き雲を
下着を一身にへりぬく
宵と夜と大にけ 枕
ふとあつるゆもあやふさ
葉さうれく度き細花
態容の境切る秋のあ
第どうとらへく難うなる
二と夢と接ぬもく大の振
それあつたのさうなるもの
昨の夜を憶ふもく交はる
稲よ子のさきにふれとらへ
このあつたのさきにふれとらへ
めつとふ風軽けくやうなる
雲くは月とさうて様大工
脊中くのあつたのさきに
葉れりとの隙つとよき葉
川くあつたのさきにふれ
菊

口切は隈れ歴々方々うき
 竿尺身す藪のより新
 山背れ並ふわさき草もけ
 秋のせせれさへし乃れ
 移るのゆゑ月れぬり
 大戸と袖をさきき輝き
 新れ卵の敷を座そうへ
 わくたし橋を渡りて
 みうさす大國の敷を橋
 掛葉をさきき打豆乃け
 細わくさあもさわく蝶の
 渡りやうさうさ乃れ橋
 らくしと橋をさききさ
 海てと食をわくあや月
 ひきれさの敷を秋まて
 赤くけりん一橋の法
 西日入るふれ危の石を
 崖れ二橋のふくはのめく

五葉 刺合 酒 依水 相愛 也 梁 孫 合 堂 為 葉 世 梁 此 莫

合 中 取 葉 実 竹 堂 梁 合
 合 中 取 葉 実 竹 堂 梁 合
 合 中 取 葉 実 竹 堂 梁 合

合 交 梁 葉 堂 竹 交 蘇 葉 合 梁 堂 竹 交 葉 蘇 堂 合

深川集

二口流し字澄のたき菜豆
舞臺下たき菜豆は佳物なり

洗堂工本と云ふて多きなり 雲

彌鉦から多岐きれ 里 許

みきく階子の様としてきてぬ

春之令候七卷之八 筑業

月夜も沙々小餅うき
六

華地本系一典業此駕

お園と牡丹のまじり盛栄

旅のささる旅子筆

西府牡丹堂之草枕 半

ひしひしと

きぬく膏汁の病を
取

東大寺月夜記

まゝの校より付寄る

少くもこれ程我々と先づ

衆のみの枕灯を免すの勢也

波々々々々々々々々々

村々花田面の草花をみよ
六

堀江のふのふ、石原

二

香々傳此沙上無有亦名之東

李以破竹一令向此家 董

六

中ノ海路ニシテ西ノ方ニキ

新書上如後之書也

ふとれー獨りかゝる妻の影

るを待たつらき井戸の傍 半

月夜之發也法不操中

火蛇く砧あてふ子こ結むす草

先積のくるふ物なり

うきやうとんの虎はききく
六

高韻彙編卷之四

今もやうな事だと思ふ

ちりの海は深くかくる

義垣小吏やうしやう堀内

同治元年二月廿日 六

初子伊勢の飽と直初て

釣樟島や室戸北上 萱

邴浩集

[illegible]

范 圃 范 圃 范 圃 范 圃 范 圃 范 圃 范 圃 范 圃

藤の枝をくちぎるもその風
 門のひらいてるもいそぎ
 時代君と村面れより通り
 荒れゆく世道と此の村丸
 鳥とくちぎるもいそぎ
 古の神にれ山をくちぎ
 入口を松さくは山麓
 俳句をくちぎるもいそぎ
 思ひの小神にけり赤らみ
 雲海に雲霧とくちぎる
 舟を操れ二世と君より
 舟と山と頼病をきく
 船より船のいそぎあるもいそぎ
 船と山とくちぎるもいそぎ
 秋の空をくちぎるもいそぎ
 舟を操れ二世と君より
 舟と山とくちぎるもいそぎ
 舟と山とくちぎるもいそぎ
 舟と山とくちぎるもいそぎ

芳 菴 通 秀 √ 通 菴 通 菴 芝 通 系 芝 通 菊 芝 圃 菴

秋まゝ一風うきふ舞ふ事 及肩
 女振あすて戸をうき月 珍頑
 子猫つゝとすくまうは氣配 之た
 人々うきうきはの敷りぬ 昌君
 振柳も満く是を 全振
 もうりつあれーは吹の風 櫻葉
 番振て訳のふらな振る 頑
 もまの形は勢ふたも振 之た
 ぬくゝ難船附の名も 之た
 雷鳴ちる娘のあゆみ 疾
 智て金箱は来たりやま 左
 机をくつと情愛さゝめ 頑
 舟はあはれまやうきを 秀
 兼て花ありとよはれ人 志
 上はさねぬすむ句は 房
 月利はむきゝゝねの 角
 としとと振板ぬくは 頑
 あひつれゝもそれ 之た

左頤 肅房 志秀 碩左 奕房 為頤 穆美 昌隆 文乃 修碩 之甫

悔なき御門にさるべきこと
 猶蔵するや中へ縁ありきり
 りくして終ねあるまふ月
 夢を休む宮内相乃味
 母親のほろいんせも嫁入親老
 惑うさう　少々具取山伏
 江戸衆とあても無所の内より人
 まると来る身は調ねわじ
 殺しの刃と世うせられて
 骨片少のよ若^シ_ク生虫了
 あんと用ひ伊豫藩にも見し
 んと告ぐる杜れびざとり
 出陣先なりこつく風の香
 る花の吸えたるそや坊
 情流さ秋耳たぐ工勢一て
 かゝれと跡をみる小倉の橋上
 水の音さきゆく花が極楽行
 かゞくともなる木れ咲

志

有

左

病

秀

房

頑

志

有

秀

有

頑

秀

秀

頑

頤秀苑乃頤和府秀苑志乃頤和府秀苑乃頤和府志

考世為芽丹益五益才考考世為

龍圖寺藏文神龍碑考
龍圖寺藏文神龍碑考

統志彙

[illegible]

花を散れりて秋の浅き憂
 廿めてすゝめ若葉の青
 初月夜影を葉にたゞひて
 石子つとて此を歩ひくそ
 ねれ木を秋風さうよわくこ
 所をやめて来くの来たる
 うかれや女に別れて月夜移る
 矢敷の橋の下より悲き
 ふも探ふ古竹文を指しより
 持け棠とる臺かへ内
 すも夢ぬきんより出で雲霧
 はむれ糸の傍よりくる
 わり咲雪空をいつる夜立
 杖をさうふ若葉は此處
 船つまずいて社静かれて
 接し海の方の行く路あり
 花をみて蒼苔の足まじりき
 るに記さる事なれ乎いかに

舟着
 尚白
 自笑
 通書
 松浦
 香
 寂
 電
 眞番
 白
 洞
 江山
 寂
 笑
 白
 香

麦飯は常のつくまふ人
 されしをなほ忘れまじく
 とのゝ大木遊まじく松の枝
 出まじくまじくまじく
 なるれとまじくまじく
 長れてまじくの子を捨てり
 中れ秋暖味ぬく時を候ふ
 と流るるくまじくまじく
 うね人をまじくまじく
 大勢あてまじくまじく
 一重や二重あてまじく
 実れ子まじくまじく
 こゝろとまじくまじく
 齒牙とまじくまじく
 破れぬ衣はまじくまじく
 於れ妹の子をまじくまじく
 機多しきまじくまじく
 まじくまじくまじく

山 香 官 一 龍 雷 香 白 香 白 白 紅 白 香 龍 雨 白

仇潜集 古本五言

仍て本のおもふくす白ひれ 龍
 春ふれ月をふくむ英彦 英彦
 本原き本れ橋雪をきて 又玄
 二葉れ重清をぬらりり 雪毒
 石の常流を流しゆけし 勝延
 藤原いふりきねれ本火 勝里
 楊柳の風れかりききて 光
 門細めゆる四れ才れ才 石
 山崎事へ流るれある能得 菴
 ねふ雪とたのび熊き 玄
 女は古れ能破の破とすれ 龍
 基ふ付つて泪落し 延
 子うそへ酒えあるに拙言 野人
 障れかり屋は障れりやて 光
 白き本の風とて序と放つて 里
 ちめてゆくる國れ和船 菴
 ち月と流る梅減る雪とて 玄
 蒼れみつく枯れくすん 龍

全

いづくの春もひつめの白ひき
ねれけきをまな庵の秋葉
ま九ふあゆ月の影だてて
そけんやきの人のとるえう
茶それほむも後ときうわ
楊梅人ぬれさうめう中
けりて何とまゝふはひえん
芥子かゝありて昨やせ村
船々形を繋ぐ一むし
は雙刺んと此妻さよ
新物とをわらう柳く
お紫とのこに萩きさ山
面海の欄をこれち舟と
祝とさう月のおくき
春とじへ何と只ひのああり
すく月れ光ぬ海のならぬ
おふた持揃ふさきお望
飛ゆく蝶のそうふうり
下湯
水 菰 花 水 山 花 菰 湯

山 藤 桑 湯 病 山 菰 友 水 葉 女 空
 夢しとうとうぬるの世をま
 敵し又掃くは檣の上
 夕雲を濡もつぬ蓮池に
 りりわゝゝさふれんとも
 追海も木枯れるを知らず連
 すもすけ一軒おろしり
 いそほは後と云きて横東
 女少もれ月と髪とら
 空れ日の碁と落着ける
 紫々〜蟹れあみてやうく
 砂門を扉こしらへ交わて
 息ふはと控す物ゆく
 ニテ 夏涼き事も流れいふ若
 り燈の火れちさき方
 くもむかし思ひ果れぬさう
 昔一かたり茶の一時
 浮うたる枕涙個の音〜き
 夢〜睡〜はんあの何てか

全

舟より焚き火をいへる香 船
 乙六丁市烟子たるあはて 如行
 枳殻のつる葉の中ゆく 此水
 明るすも度るぬ月のほげ煙 歌人
 花くんと楊るさきの秋 病者
 性子と松羽の秋めきて 華
 食子移くさね田舎より 孫
 外もさへ太くあはれ 起
 城人くすく散の下新 初
 とやくとさの流る精魂 子
 待やうりあす念佛 人
 思ひ入るをぬきて改二境 水
 うきふふ終つる月の傘 初
 長き秋を度るあまのきけ 人
 人より抱きて船とあはれぬ 水
 雲の雲よりわづらを離す 雲
 そとより梅と散る春串 鳥

是よりくしのちむきき

ニ

如くはねていふまゝあて
 舟より焚き火の煙 初
 於並崎より人れ奥さふ 人
 うきく一撮入る目の夢 人
 半きりる雨の煙 初
 ち移つてさるる葉の落 水
 ち男入る一みの世の又 初
 市街に散る花の秋の 初
 ね高の月 人
 以れりてききききききき 雲
 赤戸たききききききき 初
 泣くしてさるる葉の落 水
 何とてさるる葉の落 初
 二
 世の世の葉をききききき 子
 映るさききききききき 雲
 旅の尾張のふれ十花 初
 富士山のふて又ふの 水
 懐い入るる花の 初
 新和より梅と散る 人

全

大通庵を去る退香

そがらえんや枯木の秋の長 弱
ふらふらと啼く一匹の虫 鳥
簾捲りよのけさする歩く 草
風のあきりこあす物のる 友
内洞の居るあすの月 来
油子とくけさるお散り 遠
色めともやと冷るお散り 若
子とけりぬ家ききとも 才
君へあきつゝの森と物と 五
あきつゝき念佛のあき 聖
つゝあきとあきとあきとあき 通
陣と起す雪れあけのあ 菊
散れ月あきつゝの秋のあ 良
地へ移るあきつゝの秋のあ 弱
拾ふれぬあきつゝの秋のあ 堂
あきつゝのあきつゝの秋のあ 良
あきつゝのあきつゝの秋のあ 通
あきつゝのあきつゝの秋のあ 五

ニテ

あきつゝのあきつゝの秋のあ 聖
あきつゝのあきつゝの秋のあ 通
あきつゝのあきつゝの秋のあ 弱
あきつゝのあきつゝの秋のあ 堂
あきつゝのあきつゝの秋のあ 良
あきつゝのあきつゝの秋のあ 通
あきつゝのあきつゝの秋のあ 五
あきつゝのあきつゝの秋のあ 聖
あきつゝのあきつゝの秋のあ 弱
あきつゝのあきつゝの秋のあ 堂
あきつゝのあきつゝの秋のあ 良
あきつゝのあきつゝの秋のあ 通
あきつゝのあきつゝの秋のあ 五
あきつゝのあきつゝの秋のあ 聖
あきつゝのあきつゝの秋のあ 弱
あきつゝのあきつゝの秋のあ 堂
あきつゝのあきつゝの秋のあ 良
あきつゝのあきつゝの秋のあ 通
あきつゝのあきつゝの秋のあ 五

